

福島日仏協会「ヴァイオリンとワインを楽しむ新年会」を開催しました



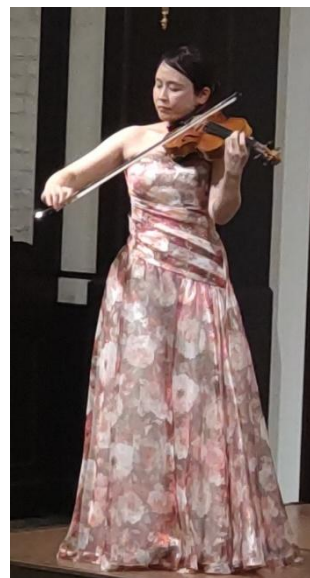
挨拶する太田英晴理事長

今年の新年会は、2月27日セントヴェルジェ教会パーティールームで33名の出席があり開催しました。混迷混乱の多い国内外の出来事が解決に向かってほしいと願う新年の集いです。又、参加予定の方が年末からの寒さ続きの影響で風邪を引かれ残念ながら欠席となり、気温の乱高下に心配りする日でしたが、ヴァイオリン奏者田中雅子さんの演奏を聴きワインとお食事で、新年をお祝いしました。

太田英晴理事長から新年の挨拶があり、ご入会頂き初ご出席のNHK福島放送局長塩塚圭輔様をご紹介しました。その後祝電の披露をして、ヴァイオリンの演奏会です。

奏者の田中雅子さんは、名古屋市生まれながら現在は福島市内に住み、国内各地で演奏活動をされている方です。ウィーン国立大学へ、愛知県立大学音楽部から留学され現地で15年ヴァイオリンの研鑽を積んだ後、帰国後は名古屋中心に関西地方でも著名オーケストラやソロで多くの演奏を披露している実力派奏者です。佐藤淳子会員から推薦を得て新年会での演奏を引き受けて頂きました、当日は演奏の都度、奏者から次の一口紹介もありました。

- ・「タイスの瞑想曲」ジュール・マスネ作
オペラ『タイス』の間奏曲 歩くようなテンポでオーケストラでもよく演奏される曲
- ・「ボル-ウナー-カペーサ」カルロス・ガルデル作
タンゴ・バーの挿入歌として作曲された。
浅田真央さんがフィギュアスケートのエキシビジョンで使用された。
- ・「愛の讃歌」マルグリット・モノー作
越路吹雪の生涯の持ち歌としてなじみのある歌。
パリ五輪開会式でセリーヌディオンさんがエッフェル塔で歌唱しました。



演奏する田中雅子さん

田中雅子さんは、3曲の紹介をしながら演奏されました。事前に会場の音響確認を済ませて貸切ホールにふさわしい強さも加えた演奏は、参加会員も久々のヴァイオリンの音色に聞きほれていました。アンコール曲を自ら「花は咲く」と話されるや、各テーブルを廻りながら演奏をされて丁寧なサービス精神で次々と移り、着席参加者の笑顔と口ずさみも見られました。

コンサート後の懇親会では、芳見弘一副理事長が開会挨拶をされました。乾杯の音頭を五阿弥宏安理事にお願いして、食事と懇親の時間となりました。久々のヴァイオリンの演奏だったので、皆さん余韻に浸りながら楽しい飲食と交流をされました。

宴もたけなわの名残惜しい「中締め」でしたが、野崎広一郎副理事長にお願いして新年の集いは終了しました。参加者も、止む無く不参加だった会員さんも、皆様にとって良い年になります様願っております。



演奏に聞きほれる参加者の皆様

たくさん的人气曲をサポートしてきた日本を代表するギタリスト！ 吉川忠英（CHUEI YOSHIKAWA）さんに独占インタビュー！

菅野喜代治会員(料理教室講師)の友人である吉川さんは、23歳でプロデビュー、以降54年間、有名ミュージシャンのレコーディングやライブツアーをサポート。ここ最近はソロライブ全国ツアーにも精力的に取り組み、アコースティックギターで奏でる癒しの音色が各地のファンに感銘を与えています。



〔吉川忠英〕略歴

1947年3月東京生まれ。慶応志木高校時代にフォークに出会い、23歳でプロデビュー。翌年渡米し、アルバム「EAST」を発売。ソングライターとして、ギタリストとして、ソロ演奏活動を続けるうちに、福山雅治、松任谷由実等のレコーディングに参加。また、福山雅治、宮沢和史等のライブツアーにも参加。2016年、WEBでのオンラインギタースクール「Masters Labo オト塾」を開講。昨年は、第74回NHK紅白歌合戦、薬師丸ひろ子「セーラー服と機関銃」に、サポートバンドとして参加している。

プロのミュージシャンになるきっかけや、その時の思いなどをお聴かせください。

大学時代に都内の米軍キャンプで演奏して、ギャラをもらいながら、ある意味セミプロのような活動をしていましたね。当時の大学卒の初任給が3万円ほどだったのですが、この倍以上の稼ぎがありました。バンドは5人組で、メンバーの中に帰国子女がいて、演奏の合間に英語でジョークを飛ばして笑いをとるなど、人気はあったと思います。グアムの基地まで行ったこともありました。こうした経験が後にアメリカでデビューすることに生きたのだと思います。一応、一般企業に就職はしたのですが、それなりに硬派なファンが応援してくれていたもので、数カ月で辞表を出して、プロの道でミュージシャンをやりたいこうと思いましたね。

54年間、音楽活動を続けている源泉はどのようなものですか？

アメリカから帰ってきて、スタジオの仕事がすぐに入ってきましたので、お役に立てるのならと、頑張ってきました。ありがたいことに、僕のギターを気に入ってくれて、フォークからアイドルまで幅広いミュージシャン、バンドに呼ばれるようになりましたね。僕のギターの基本は、リズムをきちんとキープするということを心がけています。そこがミュージシャンの皆さんに寄り添えるところにつながっているのかなと思います。「安心して歌える」という言葉をかけてくれる方もいて、うれしく思っています。

全国ツアーで各地に行かれると思いますが、その中で「福島」の印象や思いはどんなものでしょうか？

福島県は、お酒や魚、野菜、果物が美味しいし、人情があって気持ちの温かい人が多いという印象です。これまでも福島はもちろん、郡山・いわき・伊達・二本松でライブをやってきましたが、その度に地元の皆様にお世話になり、ありがとうございます。

7月2日(水)に福島市栄町『SORA -Music Square-』でライブを行います。聞きどころはどんなところでしょうか？

「なごり雪」「涙そうそう」とか、会場の皆さんと一緒に歌える時間もあります。もちろん、僕のオリジナル曲も聴いていただいて(笑)。小話をはさむなど、クスッと笑える雰囲気も楽しんでもらえたらと思います。ぜひ、ライブ会場に足をはこんでください。

吉川さんを日仏協会の皆さんに紹介しながら、7月のライブを楽しみにしています。ありがとうございました。

■福島市でのライブチケット(1リンク付4,000円)は
読売 Palette(パレット)/佐藤元さん(会員)まで
お問い合わせください。 携帯電話 090-7525-3940

シュランベルクの思い出

2011年から数年間、1年の半分近くをシュランベルクで過ごす生活をしていた。シュランベルクとはドイツ南西部、フランスやスイスにも近い、黒い森地方、その真っ只中にある小さな町である。時計産業が盛んだった町で、1861年創業「ユングハンス(日本での通称はユンハンス)」という時計製造会社がある。時計がお好きな方ならご存知かもしれない。黒い森は、あの鳩時計(カッコウ時計)の故郷でもある。

この町に住む、30年来の知人宅に滞在していた。知人の家は1824年に建てられ、町の文化財保護建造物に指定されていた。その指定を受けると、建物の改修には色々と制約が課されるそうだ。外観は創建時の姿をできるだけ止めるようにしなければならないというように。だが家の中は、モダンで機能的に改装されている。



知人の家

以前、黒い森地方の別な町に、6年余り暮らしたことがある。しかし日本人駐在員の妻という立場では、一歩家に入れば、日本の生活とさして変わらない。ドイツ人の暮らしぶりは、外から垣間見るだけで、本当のところはわからなかった。

向こうでは、海外からの訪問客であっても、お客さん扱いをしないのが一般的なようである。食事はいつも彼らが食べている物だし、洗濯掃除といった家事も分担する。誕生会などの行事にも、準備(買い物、料理 etc.)から、家族の一員のように加わる。客のために生活パターンを変えることも基本的にはない。とはいえ、常に行動をともにするわけではなく、知人宅では寝室とバスルームを提供され、プライベートの時間は尊重してくれる。

シュランベルク滞在からひとつ、地元のコーラスに参加した思い出を書いてみようと思う。

知人は薬剤師の仕事のかたわら、長年シュランベルクの合唱団に所属していた。この合唱団フローズィンは、女声コーラス、男声コーラス、そしてゴスペルの3つのグループから成り、週一回、カトリック教会の隣にある、町の音楽学校の一室を借りて練習を行う。音楽学校とは、子供たちがピアノやヴァイオリンなど、楽器のレッスンを受けたり、多様な音楽活動ができる町立の教育施設である。

合唱団には、かつては多くの団員がいたそうだが、高齢化が進みメンバーも減少し、女声コーラスは十数名だった。指導には高校の先生があたってくれていた。本格的な合唱経験がなくても、歌うことが好きなら誰でも参加できる、気軽なコーラスグループである。この合唱練



町の音楽学校(右の建物／左は教会)



女声コーラスグループ(フランクフルトにて)

習にも同行した。みんなの楽しみは、練習の後、居酒屋に立ち寄り、軽く飲みながらおしゃべりすることだった。また合唱団には「シニア団員の会」というのもあった。おおむね65歳以上の団員が、月に一度レストランで顔を合わせ食事を楽しむ親睦会である。このシニア団員の会合の開催日時、場所といった情報が、地方新聞に載るのである。今はもうSNSになっているかもしれないが。

2014年の夏、フローズィンが、フランクフルトで開催される「全国合唱祭」に参加することになった。

フランクフルトは、シュランベルクからバスと電車を乗りつぎ、3時間はかかる。シュランベルクから見たら大都会、自ずとメンバーのテンションも上がった。この年はワールドカップ・ブラジル大会があり、フランクフルトへ向かう電車の中、ドイツチームの試合があったらしく、得点が入ると車内アナウンスが流れ、乗客はみな大歓声を上げた。ドイツ人のサッカー好きは相当なものである。

この合唱祭には、ドイツ各地から多くの合唱団が一堂に会する。大編成の合唱団もあれば、小グループもある。レベルもプロ級から、ほとんど素人まで様々だ。フランクフルトにある、教会やコンサートホール、学校、公共施設などが会場となり、各会場、同時進行で演奏される。コンクールのように順位が付く部門もあるが、われわれフローズィン・女声コーラスのように、老人ホームで演奏し、入居者のみなさんといっしょに楽しむといった形もある。金融都市フランクフルトが、いたるところ、歌声で溢れる2日間であった。

安齋 令(会員)

スイスでの生活

ある日、早く帰ってきた父から「春にスイスに行くことになったよ」と報告があり、アルプスの少女ハイジが大好きで、20 歳になったら絶対にスイスに行く決めていた私は、とても嬉しく、わくわくしました。今では考えられませんが、その頃海外に行くことは珍しく、これを最後にもう会えないかもしれないとスイスに赴任する際は、箱崎のバスターミナルの一室に親せき、会社の方、友人など総勢 80 人程が集まり、私たちを万歳三唱で見送ってくださいました。

5 月のスイスは、夜 10 時近くまで明るく、ホテルで食べるクロワッサンや濃厚なバターと美味しいジャム、生まれて初めて飲むふわふわのカフェラテに中学生だった私は、世の中にはこんなに美味しいものがあるのかとただただ感動しました。



奥に見えるのがジュネーブで暮らした家で、この先にレマン湖や鶏小屋がありました。

ジュネーブの家は、レマン湖畔にあり、庭には、サクランボ、青りんご、赤りんご、洋ナシ、ラズベリー、クルミの樹があり、ウサギとニワトリ 10 羽がいました。毎朝ニワトリに餌をあげて、産みだての卵をとりに行くことが私と妹の仕事で、夏になると、青りんごやラズベリーをつまみながら、庭のレマン湖で泳ぐという大自然の恵みを最大限に楽しんで生活していました。庭のりんごや洋ナシと温かく産みだての卵で作るケーキは、絶品で、学校から帰ってくると母の焼きたてのケーキのにおいが家中にあふれ、それだけで幸せになりました。母とよく



クルミの樹の前の鶏小屋



たまに友達と料理を作ってランチを楽しみました。

ケーキを作ってアフタヌーンティーを楽しみました。海外での生活は、初めてのことも多く大変なことも多々ありますが、時間の流れがゆっくりで、家族で旅行をしたり、友人とパーティーに参加したりと、日本よりも生活を楽しむことができます。

当時、通学していた学校は、正午から 2 時までが昼食時間で、学校近くに住む子ども達は一度家に戻り、家族で食卓を囲んでいました。私も職場から戻った父と母と家族で学校のことなどを話しながら、昼食を楽しんでいました。自然の恵みを感じながら、ゆっくりと家族や友人と食卓を囲む時間は、幸せを感じる時間でした。欧米人が、週末家族や友人を招いてランチやディナーをするのはそんな幸せな時間を大切にしているからですね。

佐藤 美奈子

お父上佐藤剛男様が通産省時代に海外赴任で渡欧された際、スイスの家庭、学校での体験思い出を寄稿頂きました。

第 3 代理事長だった瀬谷俊雄様が逝去されました

謹んでお悔やみ申し上げます

瀬谷俊雄様は、3 月 11 日に肺炎で、東京都内の病院で亡くなりました。元東邦銀行頭取時代に当協会理事で在任され、2 代目の 友田昇様の後任会長として、平成 18 年 2 月から会長に就任され法人化した平成 23 年 11 月から令和 4 年 7 月迄、銀行会長、相談役、顧問とご多忙の傍ら 17 年間代表理事として協会活動の指揮、ご指導を賜りました。その後 2 年間理事も務められ総在任は 20 年を超えての役員活動をされました。ご尽力頂きありがとうございました。

